

僕は後悔していない

「いや、これが最後だ。
会って、彼女の口から聞き、
もう近づかないでしよう。」

そう思いはめぐる。
しかし、僕はじっと庭を見ているだけで、
体はカチンカチンにかたくて、全く、動かない。
その時だった。

「ほな、後、お留守、お願いね。」
誰かが、家から出てくる音がする。

戸口に立っている僕はもう逃げられない。
最後の覚悟。

「気を強く持て！」
自分の姿が悲しい。

お母さんが出て来る。
戸口のしきいを越えて出て来た。
そして、ギラギラの空を見上げ、
手の日傘をさそうとする。

僕の顔からすぐ数十センチに
お母さんの横顔がある。
その瞬間、僕に気付き、
僕の方、右に顔を向けた。

「どなたはんですか、なんか、御用ですか。」
お母さんは僕をにらむ様に、強く尋ねかけた。